

油断

— 備えあれば憂いなし —

1975年、故堺屋太一氏が書かれた「油断!」という世界初の予測小説が発表され、話題となった事を覚えておられる人は、今では少なくなったかもしれません。

1973年、第四次中東戦争を契機に、OPEC（石油輸出国機構）諸国が原油の供給を制限した事を機に第一次オイルショックが発生しました。

当時日本では原油の8割を中東に依存していて中東の原油価格が70%引き上げられた事を受け「狂乱物価」といわれる激しいインフレが発生し、これを抑えようと日銀は公定歩合を9%まで引き上げ、この金融引き締めによって景気が悪化し不況に陥った訳です。

その後、1970年代末から1980年代初頭にかけて原油は再び上昇し、第二次オイルショックが起きました。

当時日本は、全エネルギー源の75%を石油に頼り、そのうち99.7%が輸入、さらに8割が中東からでした。

今年2月、米国とイスラエルの突然のイラン攻撃によって起こった石油供給問題は、1970年代の日本と2026年の日本の状況は同じではないとはいえ、再び日本はじめ世界に大きな影響を与えてきています。当時の教訓を生かして石油の備蓄体制の強化、天然ガスの活用、省エネ等のエネルギー対策は進んできてはいますが、今の社会は電力、通信、物流、決済、医療、介護、データセンター等々、社会基盤の多くが目に見えないかたちでエネルギーに深く埋めこまれていて、どこから乱れ、誰が先に困るか見えにくいまま、社会全体が不自由になっていくという状況にある様に思います。

堺屋氏が当時見抜いていた、人間と組織の鈍さが招く「油断」の構造は、今も変わらず続いていて、こうした時代に必要なのは、自分の力で情報を集め、考え、備えるという「自助」の精神だと思います。

「油断!」は半世紀前の作品であるにもかかわらず、今読み返しても古びてないどころか今もこの本の予測に近い状況が起こりつつある事に加え、世界各地で覇権国家の台頭による世界秩序の崩壊が続く現在、国家も個人も備えを急ぐ必要性を強く感じる最近です。

徳真会グループ
代表 松村 博史



那智の滝と飛瀧神社（和歌山県）